



なごや「聖歌」だより 10月号 '10

聖ニコライの翻訳と聖歌

10月9日から11日にかけて、大阪京都で聖ニコライ列聖40周年記念行事が行われます。ニコライ大主教の偉業の中でも今回は特にその翻訳事業にスポットが当てられ、講演会展示会が開かれます。

ニコライ大主教は実際的な方で、宣教開始当初から、まず主日祈祷、洗礼、復活祭、埋葬などを部分的に翻訳し、とりあえず祈祷を实践し、使いながら改訂を重ね、だんだんと本格的な祈祷書を完成させてゆきました。明治10年頃の『祈祷祭文』と書かれた「主日祈祷書」を見ると、早課や時課の聖詠も三分の一ほどで、訳語も後のものとは異なります。明治18年頃今も使われている『時課経』が出版され、30年代に『福音経』『使徒経』、最晩年の明治40年代に『八調経』や『三歌斎経』など大判の祈祷書が出版されています。これらもまず『八調経略』や『受難週奉事式略』などの略本を作り、実際の祈祷を行いながら、次第に本格的な祈祷書を作ってゆきました。出版のたびに改訂され、ニコライ大主教が常により正確でよりわかりやすい翻訳を目指していたのがうかがわれます。

聖歌の面でも実際的な配慮を行いました。ふつうロシアではステヒラやトロパリなどは楽譜は用いず、聖歌者は八調のパターンを覚えて歌うのが基本ですが、不慣れた日本人信徒のためにチハイ氏などの協力を得ながら、当時ロシアで一般的に歌われていたメロディ(リヴォフ・バフメテフのオビホード)にもとづいて楽譜に書き下ろし、石版印刷機で印刷し、全国に配布しました。しかし、ニコライ大主教はこの聖歌譜にも満足していたのではなく、さらなる向上、日本語と日本文化に合った日本人の心に響く聖歌を望んでいました。

明治41年の秋、東京音楽学校の助教授であったイオアン原田氏が受洗した際、ニコライ大主教が述べた言

葉です。

「(今の)正教会の聖歌譜はみな(ロシアの音楽の)翻訳です。本当の日本人の心の歌ではありません。なんとしても日本人の信仰ある音楽家によって日本人自らの聖歌が欲しいです。」

ニコライ大主教は彼に聖歌隊に入って信仰の向上を図りながら、日本人の音楽家として聖歌の作曲を手がけるように強く勧めました。原田兄についてはその後記録がなく、聖歌の次の変化はセルギイ府主教時代のポクロフスキーを待つこととなります。

聖歌を扱うためには、西洋音楽の知識に加えて正教会聖歌の特性、祈祷の内容の理解、日本語への深い造詣が求められるために、ほとんど改訂されることなく今に至っています。またせっかく改訂された訳文も聖歌譜は古いままで、ポロキメンなど誦経者との掛け合いのとき、聖歌譜と祈祷書のことばが食い違いがおこっています。

ニコライ大主教は語ります。「私は聖歌ばかりでなく、すべてのものを『正教会の固い基礎はこういうものである』と示してから世を去ります」「私の訳した聖書もすべて改訳しなければなりません。日本の現在は過渡の時代です。五十年、百年とたつて、西洋の文化と日本の文明と融合した時分、一定の国語も定まりましょう。そのとき、誰か立派な神学者が現れて、実行してくれればよいと願っております。」(昭和26年8月25日発行『正教時報』)



♪名古屋: 10月24日代式後

主日聖体礼儀後、

主日朝、9時15分頃から声出しウォーミングアップをしています。どなたもご参加できます。

♪半田: 10月13日(水) 12:00

10月の指揮当番 3日ピーメン松島、17日 エレナ広石
31日マリア松島、

ズナメニイ研究会

次回は10月20日1:30

クリュキー(記号)の復習をしながら、ズナメニイの記譜、音楽付けの特徴を学んでいます。テキストはリガで2002年に出版されたズナメニイの教科書です。

♪大阪: ニコライ祭聖歌参加者の最終練習会

10月3日(日)最終練習日13時から16時まで、大阪で
※聖体礼儀当日の飛び入り参加はご遠慮ください。

聖歌練習

10. エクサポスティラリー（差遣詞）、
 フォタゴギコン、スベチーレン（光耀歌）
 ἑξαποστειλάριον, зксапостиларии;
 φωταγωγικόν; светилен

早課で、カノンと小連禱のあと、讃揚の聖詠（第148から150聖詠）「凡そ呼吸ある者」とスティヒラの前に歌われる歌です。日や祭によってエクサポスティラリーと呼ばれたり、光耀歌と呼ばれたりしますが、どちらも同じ歌で、トロパリに似た短い詩（スタンツァ）です。ギリシア語のἑξαποστειλλω（「送り出す」の意）が語源で、聖歌隊から一人の歌い手をアムボン上に派遣して歌わせためについた名称です。残念ながら日本では復活祭（「王および主よ」）や聖大木曜日（「主よ、爾は善智なる盜賊を（ラズボニカ）」）以外ほとんど歌われませんが、ソロあるいはトリオが代表して美しいメロディで歌います。

なかでも特記すべきなのが、主日早課で歌われる復活の11のエクサポスティラリーです。これは早課の11福音の読み、この後で「凡そ呼吸ある者のスティヒラ」の最後に歌われる11の福音スティヒラとセットになって、その日読まれた福音の内容を解説したり、ドラマティックに描き出したりして福音の理解を深めます。ほかの内容が八調に従って歌われるのに、この3つだけは11週のサイクルで循環しています。八調経の巻末に別枠で記載されています。

復活のエクサポスティラリーの内容から、福音を宣べ伝えるために使徒を「送り出した」からエクサポスティラリーと名付けられたとする説もあります。しかしそれでは「復活の11のエクサポスティラリー」以外に当てはまりません。他の祭日ではその祭のできごとをメインテーマして歌われています。

光耀歌フォタゴギコンという名称はギリシア語のφῶς「光」に由来し、内容が光、光照に関連することから説明されます。

＜例＞神現祭の光耀歌

恩寵及び真実たる救世主は、イオルダンの流れに現れ
くらやみ かげ い
 て、幽暗と蔭とに寝ぬる者を照らせり、蓋近づき難き光は来たりて現れ給へり。

中には光についての記述のない光耀歌もあります。

＜例＞生神女就寝祭の光耀歌

地の極より此に集まりたる使徒等よ、我の体をゲフシマニヤの村に葬れ、爾我が子及び神よ、我の神を接げ給え。

ほかに早課の終わり、ちょうど夜が明ける頃に歌われるから「光耀歌」とする説もあります。

**早課の福音、差遣詞、復活スティヒラ
 (例) 第5福音**

たとえば、早課の第5福音では、ルカ伝24章12-35が読まれます。

要約すると、
 ペトルは墓に行き、遺体が包み布だけになっているのを訝りながら戻った。エムマウス(エマオ)に出かけた二人の弟子クレオパとルカが、道々、イイススの十字架と復活について話し合っていると、イイススが近づき話しに加わったが二人にはそれが誰かわからなかった。イイススは旧約聖書に書かれているご自身についての預言を説き明かされた。一緒に宿に入り、彼がパンを割き祝福したときに、イイススだと気づくと、彼はいなくなった。二人は急いでエルサレムに戻った。

第五のエクサポスティラリー

生命及び道なるハリストスは死より復活して、クレオパ及びルカとともに旅して、エムマウスにおいてパンを擘(さ)く時、彼等に知られたり。主が途中彼等と語り、苦しみを受けしことの聖書にかなえるを明かしし時、彼等の霊と心とは燃えたり。我、衆、彼等と偕に呼ぶ、主は実に復活せり、ペトルにも現れたり。

福音スティヒラ 第五調

嗚呼ハリストスよ、爾の定制は睿智なるかな。爾はペトルにひとり裏布(つつみぬの)を以て爾の復活を知らしめ、ルカ及びクレオパと同行して語れり。語れども直に己を踵さず、故にイエルサリムに来たりし者のうち、爾ひとり其論ずることに、いささかもあずからざるが如きを責められたり。しかれども一切を造物の益に転ずる主よ、爾は彼等に己に関する預言を解き明し、又パンを擘(さ)く時、彼等に識(し)られたり、彼等の心は是より先にも燃えて爾を示せり。其後、彼等は門徒の聚(あつ)まれる時、既に明らかに爾の復活を伝えたり。これによりて我等を憐み給へ。



ホームページのご案内

○「なごや聖歌だより」のホームページ

<http://www.orthodox-jp.com/music>
 なごや聖歌だよりのホームページの表紙で名古屋教会の聖歌が聞けます。「聖歌だより」のバックナンバーもダウンロードできます。

○ 東方正教会の聖歌 <http://www.orthodox-jp.com/maria>
 詳しく学びたい方のため正教会聖歌の特徴、聖歌の神学、歴史、など海外の資料も多数翻訳して掲載しています。

○ 正教会奉神礼研究 *Liturgia*
<http://www.orthodox-jp.com/liturgia> 奉神礼や聖歌の実践資料